



全国につながる
連携の 輪 板 橋 区

本庁舎の改築を契機にリニューアルオープンしたスマイルマーケットは、来庁者がふと足を止めたくなる、新しいコミュニティショップ。通常の福祉施設等の販売所とは一線を画して、商品価値の高い品々が並んでいます。

積み重ねてきた交流を進化・発展

板橋区には都心にある銀座や秋葉原、六本木のような派手な繁華街はないが、住民の生活が息づく地元密着の商店街や、自然が溢れる荒川など、都心区にはない住みやすさがあります。コソコソと積み上げてきた交流自治体との友情は、単に役所と役所との関係ではなく、そこに住む住民や生産者をつなぐ全国連携の在り方を示してくれています。

障がい者の就労支援と全国連携・交流

アーケード街のど真ん中に

「このキャベツはやわらかいの？」
「やわらかいよ」「最近野菜が高くなったね」「ほんとにねえ」——白髪交じりの男性が店員に声を掛けると、気さくに答えてくれます。平日の昼間でも店内には買い物袋を下げたお客さんの姿が絶えません。

板橋区大山にあるハッピーロード大山商店街。駅からアーケードの通りを歩くと、商店街の一角に「全国ふる里ふれあいショップとれたて村」があります。同商店街振興組合の直営ショップで、商店街と農山漁村との交流による双方の活性化を目指し、2005（平成17）年10月に板橋区の肝煎りでスタートしました。現在、全国の17市町村と直接契

約を結んでいて、新鮮なとれたて野菜や各地の特産品などを販売しています。

店内には、11月4日に新たに参加した千葉県いすみ市産のみずみずしい真っ赤なトマトが並んでいます。生産者の顔写真の入った「顔の見える野菜」です。実際に食べてみると、爽やかな果汁が弾ける美味しいトマトでした。

イベントなどで行われる物産展は、東京のあちらこちらで開かれて大盛況ですが、いつでも地方の特産品が買えるお店は多くありません。銀座など都心では地方都市のアンテナショップが outlet していますが、予算の少ない小さな自治体が都心でアンテナショップを開こうとすると、物件を借りるにも賃貸料が高く、



全国ふる里ふれあいショップ『とれたて村』

事業主体 ハッピーロード大山商店街振興組合

参加市町村 17自治体

開店 2005年10月15日

住所 板橋区大山町27-9

面積 約18坪

営業時間 午前10時～午後7時、年中無休

北海道稚内市、同小樽市、同岩見沢市、山形県尾花沢市、同最上町、千葉県鴨川市、同いすみ市、東京都八丈町、熊本県八代市、秋田県北秋田市、同横手市、鳥取県大山町、長崎県平戸市、和歌山県田辺市、岩手県二戸市、長野県安曇野市、京都府福知山市

ハードルが高いのが現状です。

ハッピーロード大山商店街は銀座などの都心からは離れています。都内でも有数の元気のあるアーケード街です。全長約560坪に約200店舗が並んでいて、「とれたて村」はそのど真ん中に位置しています。都心のアンテナショップとは一味違う一等地です。

とれたて村の1日平均の売り上げは15万円。客単価は700円とさほど高くはありません。それでも、売

り上げ利益と市町村参加費を運営原

資に、区の支援なしで自立して経営しています。首都圏で地元をPRし、観光客の誘致や販路拡大につなげた市町村、地方の魅力を活用し、集客したい商店街、交流都市を通じて地方の特産品や新鮮な野菜などを手に入れた区民、お互いがワイン・ワインの関係で成り立っています。そこで生活する住民と地方の生産者が結び付き、商店街も農山漁村も元気になる場所でもあります。

本庁舎で全国の特産品を売る

昨年5月、板橋区役所本庁舎にあるコミュニティショップ「スマイルマーケット」では、「とれたて村」と連携して、全国の特産品の販売を始めました。

本庁舎改築で3月にリニューアルオープンした「スマイルマーケット」は、障がい者施設20施設の自主生産品だけでなく、区民からの公募で選ばれた人気の和洋菓子、お総菜、パン、お酒などの「板橋のいっぴん」10店舗、さらには区と交流のある自治体の特産品も合わせて販売しています。区内就労支援事業所が、全国

各地の特産品を仕入れた「とれたて村」から販売委託を受け、スマイルマーケットで販売します。売り上げに応じた手数料が販売に携わる障がい者の賃金の原資となります。

各地の特産品は月2回のペースで、板橋区役所で販売されています。売れ行きは好調で、売り切れた商品を追加する繁盛ぶりです。

区の担当者は「障がい者施設にはどういった商品が売れているのか勉強し、自主生産品の開発に活かしてほしい。お客様にはぜひ、これをきっかけにハッピーロード商店街や交流自治体にも足を運んでもらいたい」と話しています。

スマイルマーケットは、障がい者の就労支援と全国自治体との連携交流の促進を絡めた全国でも珍しい店舗です。障がい者が自主製造品の販売に携わるお店は、役所の売店の一

友好交流都市としての関係を発展

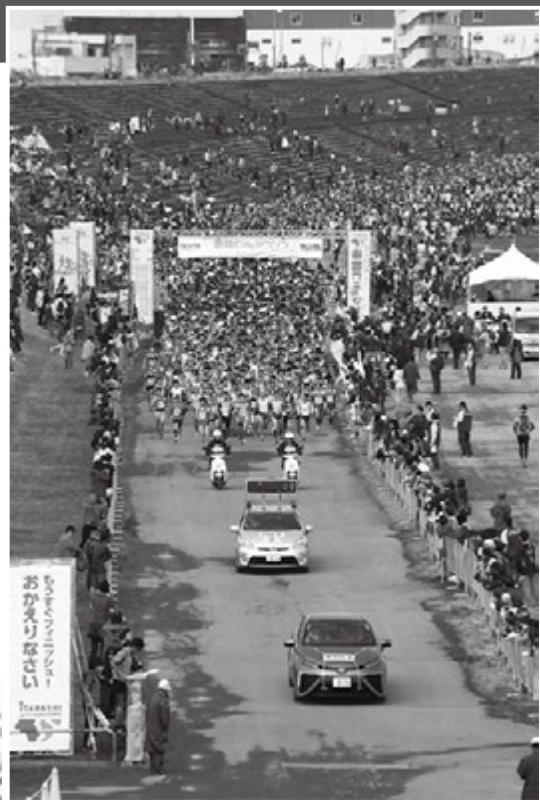
フルマラソンで連携協定

2015（平成27）年3月14日、北陸新幹線の長野・金沢間が開業し、

角などでよく見掛けますが、より一般的な客層に販路を広げるという意味では弱い存在でした。また、「とれたて村」が商店街を出て多角的に出張販売を展開することは、採算性で制約が生じます。一方、板橋区では、障がい者の就労訓練の機会創出だけでなく、全国の各地域と様々な分野での新たな連携、区民等との交流を模索していました。

「とれたて村」は、全国屈指の元気な商店街が板橋区とタッグを組んで仕掛けた「全国連携」の先駆けでもありました。長年にわたって培ってきた交流自治体との関係を、物産展で特産品を売る、災害時に協力するという関係から一歩進み、ワイン・ワインの関係を築いています。区はその潜在力を活用して、障がい者の就労支援につなげているのが大きな特徴です。

東京と金沢が新幹線で結ばれました。これを契機に、石川県金沢市は同年11月15日、金沢マラソンを初めて開催しました。一方、板橋区は「板



荒川沿いの自然を満喫しながら走る板橋Cityマラソンは、東京マラソンと並んで日本陸連が公認するフルマラソン。1万5千人のランナーが参加します。今年は3月19日に開催されます。



「橋Cityマラソン」を毎年3月に開催しています。日本陸連公認コースのフルマラソンは、都内では東京マラソンと板橋Cityマラソンだけです。

金沢マラソンの開催を控えた2014（平成26）年12月8日、「板橋Cityマラソン実行委員会」と「金沢マラソン組織委員会」は、「マラソン大会の開催における相互協力に関する協定」を締結しました。

これ以降、2015（平成27）年

3月の「2015板橋Cityマラソン」には金沢マラソンPRブースを出展。同じ年の11月の「金沢マラソン2015」前夜祭、スタートセレモニーに坂本健板橋区長が出席。

「金沢マラソンもてなしメッセ」には板橋CityマラソンPRブースを出展しました。

2016（平成28）年3月の「2016板橋Cityマラソン」には、金沢マラソンPRブース出展のほか、山野之義金沢市長が出席し、

ジュニア3⁺の部のスターターを務めるなど、お互いの交流が活発に行われています。

両者とも同じフルマラソンですが、板橋区は荒川の開放的で自然豊かな河川敷を往復するコース、金沢市は古くからの街並みや観光名所を回るコースと、ランナーにとっては趣が異なります。連携協定を契機にお互いの大会に参加するランナーもいて、連携協定の効果も徐々に出てきているようです。

板橋区と金沢市はかつて区内に加賀藩の広大な下屋敷があったことが縁となり、1979（昭和54）年に板橋区民まつりに豊年太鼓とミス百万石が参加したのを皮切りに交流を重ね、2008（平成20）年7月



2015年に開催された金沢マラソンの前夜祭であいさつに立つ坂本健板橋区長。板橋Cityマラソンと金沢マラソンは連携協定を結んでいて、双方の大会に参加するランナーもいます。

に友好交流都市協定を締結しました。

両都市のマラソン大会同士の交流は、これまでの友好交流都市としての関係をさらに発展させたものと言えるでしょう。

積み重ねてきた関係

特別区長会が全国連携プロジェクトとして全国の市町村に連携・交流を呼び掛けたのは、2014（平成26）年9月。板橋区においても交流人口の増加を図るなど産業・都市連携によるまちづくりを戦略的に展開しており、今回紹介した事例は、これまで積み重ねてきた交流自治体との関係を、さらに進化・発展させたものです。日本有数の元気な商店街を核とした交流自治体と区民との顔の見える関係づくり、そこを基盤としたスマイルマーケットでの障がい者就労支援、そして、北陸新幹線の開業を契機としたフルマラソン大会同士の連携。いずれもゼロから始めたのでは実現できない交流自治体との関係を進化・発展させた新たな連携の在り方を示しているのではないのでしょうか。